シーク教の過去及び現在

手島文倉

第一　序論

——印度人の宗教熱——回教と印度教——印度教改革運動——信仰界の推移。

第二　カビールの新宗教運動

——印度教の回教的感化——カビールの新教義。

第三　ナーナクのシーク教

——ナーナク傳——シーク教の教義——根本聖典『アーディグラント』——祈願『ヂアップヂ』邦譯。

第四　ナーナク以後のグル十世

——アルヂャン最初の殉教——回教の迫害——教義の變遷——グル第十世ゴビンドの殉教。

第五　シーク教獨立國

——バンダ最後の奮鬪——悲慘なる殉教——獨立國の八十餘年——英軍との衝突。

第六　シーク教の現狀

——教團の分派——教徒の數——軍人としての位置——道德、政治、宗教上の功績。

第七　アムリツァールの黃金閣

——由來——信條の具體的表現物——教徒と洗禮灌頂——シーク教の將來。（以上）

第一　序　論

（一）　印度は詩の國、戀の國と謳はれて居るが、不思議にも、其の詩と戀は、殆んど、著しい宗教的色彩を以て飾られて居らぬ者はない。否、寧ろ、宗教に依て飾られたと云はんより、信仰の一面が流露して詩となり戀となつたと云ひたい。故に、印度は宗教の國、印度の民は信仰の民と云つた方が適切であらう。蓋し、何れの國、何れの時代の何人を觀るも、印度の民ほど信仰なくして活き得ない者を知らないからである。世界最古の聖典吠陀（veda）は、今日に至る迄茫々上下數千年の流れを以て、尙ほ民族一般信仰の基調と成り、婆羅門は之を暗誦すること寔に神妙の域に達してをる。此の淘々漾々たる民族信仰の流れは、信度と共に澱なく、恒河と共に滔々として竭きない。其の信仰の流れの直中に宗教改革の旗幟を推立てゝ難航の舟に篙した者は、幾人有

るか知れない。或者は流れに逆航せんとし、或者は流れを阻止せんとし、又或者は流れの方向を轉ぜんと企てた。古くは、婆羅門正當敎を以て任ずる六派哲學あり、異端邪流と目せらるゝ佛敎、耆那敎（Jainism）の如きあり、理論を尊び、清淨なる道德を訓へ、理性の光を以て禁欲の苦行を奬勵するかと思へば、輪廻轉生と業力因果との民族信仰を罵倒した順世外道（Lokāyata）の唯物主義快樂主義もある。此等の所說を精査して印度民族信仰の大流推移の狀を味ふ事は、興味森々たる問題であるが、今、此に論究して見度いと思ふのは、右の樣な古い問題ではない。彼の歐洲大陸の一角に於て、千五百十七年の歲の暮、ヴィッテンベルグ（Wittenberg）の城內敎會（Schlosskirche）の門前に、九十五個條の信仰的疑問が、美しき拉典文に於て、ルーテル（Luther）に依て揭げられし頃、印度の西北、パンジャッブ（Panjāb）の一寒村に於ても、一人の宗敎的天才が現はれ、新らしい信仰を宣傳して多くの民の渴仰歸依の的となつた者がある。バーバ、ナーナク（Bāba Nānak）のシーク敎（Sikhism）卽ち之れである。由來、印度に於ける多くの宗敎改革は、其の始めは、最も稱讃すべき、神聖なる精神の上に立脚せるに拘らず、其の後代に迨んでは、不知不識の間、次第に民族信仰の大流に同化せられ本來の特色を失して滔々と押流され、以て今日に、幾分の俤を存する者、比々然りと云つてよい位である

が、今此のシーク敎の如き、亦其の類に漏れずとは云へ、他の諸例に較ぶれば、著しい性格を以て居り、世界に於ても、類稀な異彩を放つた宗敎であるから、此の點が先づ、吾人の注意を惹くのである。寔に民族信仰の大勢は偉大である。

如何なる改革的企圖と雖も、何時かは、大勢に同化されて殆んど本來の特色を失し、漸く今日に餘命を繼ぐ有樣であつて、既に此の大勢中に同化された者は純正なる性質に非ず、同化されざる眞精神は流れて他の國土に入り、他の民族の靈を潤ほして居る。預言者の鄕に容れられざるは此が爲めであり、佛敎の如き、基督敎の如き、之が在來の民族信仰との關係を觀れば、その好例と信ずる。

印度に於ける今日の佛敎が、純正の精神を忘れて、印度敎化されて居るのも當然である。シーク敎も亦然り。其の始めに在つては、在來の一般成立宗敎を排拒して、一切の眞理を攝收せる大信仰と信じて居たけれども、民族信仰の大勢、殊に舊慣を墨守する印度の民の夫れには、到底抗し難く、現時のシーク敎徒は、殆んど印度敎か回敎か或は基督敎徒に改宗汲化されつゝある。然し信徒二百萬を算するは、亦、吾人の一考に値する現象と言つて宜い。

(二)　何れの宗敎に在つても、既成宗敎、殊に勢力ある思想的環境の感化から、全然脫

する事は出來ない。此の意味に於て、宗教を獨創開立すると云ふは不可能である。然し其の新宗教が、環境的感化の何れの部分を取捨せるかは、注意すべき點である。シーク教成立の當時、西北印度に於て、最も勢力有りし宗教は印度教と回教とである。シーク教が、兩教の感化に成れる、元より當然である。

印度教(Hinduism)は元、婆羅門教より派生した復古的改革運動に始まるが、混沌たる信仰狀態は九世紀に及び、六見の祖(Saṇ-mata-sthāpaka)と仰がれし商羯羅阿闍梨(Çaṅkaracārya)に依て確立された者で、後世彼を祖とする多くの分派を生ずるに到つた。然し、著しき特徴なく、高尚なる道德を說かず、傍ら、多くの迷信を混入する所から、腐敗墮落の頽勢は、一大天才の出現して、之を改革洗滌するの必要を待つに到つた。回教の印度侵入も、亦早く、ムハメッド(Muhammad)の開宗より三十餘年、既に其の一將は、信度の境上を偵察したと云はるゝが、著しく印度を侵蝕したのは十一世紀以後にある。回教と印度教とは相容れざる點が多い。忽ち二者の衝突を惹起し、南方印度に於けるマーラッタ同盟(Marattas)の宗教運動と、西北印度に於ける、シーク教運動とは、回教徒が永年迫害慘禍を被つた二大强敵である。然し、衝突はその初期に在り、接觸の久しき、印度教と回教は、互に著しく感化影響を交換した。異國の民に、異域の信仰を植

えんとする、必らずや、此の折衷感化の現象を生ずる、元よりである。支那朝鮮に於て儒、老、佛、折調の思想あり、我邦に於て本地垂迹の說ある、亦、此の類に外ならぬ。シーク敎は、實に如斯して、回敎と印度敎との折衷調和的精神に成つた者で、而も、以前より有つた同一傾向を高調したに過ぎないのである。故に、其の成立や、一見、平凡である。然し、該敎の妙味は、寧ろ當初になく、後代の信仰推移の狀況に在る。

(三)　宗敎の榮枯盛衰は、信條の性質と信者の性格とに俟つ所が多い。然し、時勢の必要と敎團中心人格の意嚮とに依ては、信條の解釋をも異にし、信者の性格をも練磨訓淘する事が出來る。吾人は、多くの宗敎に就いて、迫害、殉敎、法難が一層、信徒の狂熱的信仰を誘發鼓舞する事ある實例を見る。基督及び使徒に於ける、又は、日蓮に於ける、實に然り。故に、信仰は必らずしも舊套を墨守すべき者でなく、時勢と共に推移して然るべき者と思ふ。若し之を以て信仰の墮落と思惟する者あらば、夫は、時代の大勢を達觀せざる者であり、信仰的使命を全ふし能はざる徒である。今、シーク敎に就いて之を觀る、亦、大に、吾人の三顧に値する者がある。

吾人は以下少しく、此の異彩を放てる宗敎に就いて、其の思想信仰の由來と、敎義の大綱と、又、信仰變遷の狀況及びその現狀を紹介して見ようと思ふ。以て、新宗敎問題

に就いて大に考へさせられつゝある現時の我が國家社會に、幾分の暗示を與へ得る事もあれば幸甚と思ふ。

第二　カビールの新宗教運動

(一)　シーク教の開祖、ナーナクは、亦、時代の子である。彼の當時の印度社會は、殆んど天下の統一者を缺いで居たほど亂れて居り、種々の宗教的運動の渦卷く裡に人と成つた。

彼が、印度教に非ず、回教にも非ざる新宗教を開創するに至つた迄には、過去二、三百年の間に薫蒸された信仰運動の流れがある。此の流の裡から瓦を捨て、玉を拾ひ集めて嚴正な道德的新生活の曙光を放ち歌つたのが、シーク教である。左れば、吾人は先づナーナク信仰思想の由來を尋ね、最も感化の偉大であつた先師、カビール(Kabīr)の主張の一班を見ようと思ふ。

回教が、西印度に侵入し來つて印度教徒と爭ひ、萬難を排して傳道に努力し、他教徒を迫害し、僧徒を殺戮し、寺院を破壞し、崇拜像を蹂躙してより、四百年、劍の力とコーラン(Koran)の說とを以て、印度大半の政治、宗教の實權を掌握するに及び、俗信に墮落せ

る印度教徒は、純一の信仰と鞏固なる教團との必要を回教より學んだ。他方、回教徒に在つても、土民古來の信仰の牢乎として拔く可らざるを知つて、印度教と調和せん事を企て、今や、正統信仰（Sunni）の時代は去つて異流（Śiah）の時代となり、或は神人の關係を説くに人間愛情の關係を　て神人合一を謳へ、ムハメッドの二孫を以てラーマ（Rāma）クリシュナ（Kṛṣṇa）の信仰に模するに至つた。兩教の互に影響せる狀想ふべきである。回教の印度教的改革有ると同時、印度教の回教的改革は、最も著しく世人の注視を集め、新信仰の運動は、十二世紀から現代まで、幾多の聖祖、偉人を輩出するに到つた。ナーナクも亦、此の中の一人に外ならぬ。カビール、亦然り。

抑々印度教の正派、吠檀多（Vedānta）の流を汲む者に、商羯羅の後を受けて、十二世紀にラーマーヌジャ（Rāmānuja）有り、毘濕拏（Viṣṇu）神の一名たるハリ（Hari）神を唯一最高の慈愛者と敎へ、局限唯一論（Viṣṭādvaita）の敎理を以て道德的信仰生活を説き、南印度を發祥地として全印を遊歷してより、敎化遍く、高弟七十四人を得たと云ふが、彼が人格的のハリを説き、マーヤー（māyā, illusion）の無明を以て世界を説明した傾向は、後世に深く感化を與へたのであつた。彼が後繼者中、第五世、ラーマーナンダ（Rāmānanda）なる者は、十四世紀末の人、ベナレス（Benares）を中心として恒河流域に通俗的敎

化を布いた。ラーマーナンダの繼承者に所謂十二使徒有り、スールダース（Sūr-Dās）の毘濕拏讃歌、ダードウ派（Dādū-panthis）、キール（Kīl）のカーキス（Khikis）派等永く傳はり、特にナーナクより六十三年の若者たる天才詩僧ツルシーダース（Tulsī-Dās）の『羅摩所行の湖』（Rāmacaritamānasa）は、ラーマーヤナ（Rāmāyana）と共に羅摩派印度教の二大聖書となつた者である。此等ラーマーナンダの使徒又はその後繼者中には、理髮師、織工、皮商、婦人あり、社會の階級思想を打破して羅摩化神無限の愛を敎へた。彼等は師の箴言として、常に說いて曰く、

"No man asks of race or creed, if one worships Hari, he is Hari's own."

吠檀多敎中に、唯一神を說き來り、印度幾千年の舊習たる四姓の別を無視せる如き、明に印度敎の大變革であつて、又回敎の感化を想はしむる者である。ラーマーナンダの感化は、斯くて一般民俗の歡迎する所となり、遍く及んだとは云へ、由來、印度敎中、濕婆派が高貴上流社會に行はるゝに反し、此の毘濕拏派は、下層民俗間に流布したが故に、神話を曲解して極端なる不道德を說く者現はるゝに到つた。十五世紀のチャイタヌヤ（Caitanya）、バラブハ（Vallabha）が西部印度と雪山地方に於いて淫靡なる肉欲放恣主義を主張せる如き此の傾向の一端である。左ればこそ、此の流を汲む、カビール、

ナーナク、其の他の者も、再三、改革運動を企てた譯である。カビールは實に、ラーマーナンダの弟子であり、ナーナクは、カビールの弟子を以て自任せる人である。共に、印度教の回教的改革を企てし二大明星であると言つて宜い。

（二）北部印度に回教あつてより四百年、感化漸く土民間にも侵入せる頃、千四百年代の始めに當つて回教徒なる織工の子に、カビールなる者、現はれた。幼時より回教に親しみ、長じてはラーマーナンダの弟子となり、十二使徒中の上足と言はる。常に、印度教の信仰的生命無きを慨し、回教の唯一神崇拜の力强きを讃し、師說を大に新にして出藍の譽を擧げんとす。彼が教義として、先づベナレス中心の多くの弟子に說ける所を見るに、神の一體たるべきを敎へ、毘濕拏と云ふも、羅摩と云ふも、將た又、ハリの名を以てするも、回教のアラー（Allah）を呼ぶも、信仰の精神に於て純眞なれば、畢竟同一神に歸する事を說き、苦行と異樣の服裝標織を排斥し、四姓の別、カスト（Caste）を捨てしめ、婆羅門を嘲弄し、富蘭那（Purāṇa）シャーストラ（Çāstra）吠陀を譏笑し、虛飾せる寺院と僞善的偶像を痛罵排斥し、祭儀呪文（Mantra）を廢して、專ら清淨なる信仰的道德の寂靜主義神祕主義を高調宣傳した。而して、一神の信仰に據つて純潔なる道德生活をなすには、信賴すべきグル（Guru）卽ち敎師を選み、信者自ら良心に訴へ、理性

に判じて、然る後は、滿腔の熱信を献げ、グルに絶待服從せん事を誡告した。又、佛教の感化と想はるゝ博愛、不殺生の禁戒を垂れ一切生物を愍念せしめたが、此等教義の大部分は、回教の精神とする所であるから、後年の回教徒は、皆彼を以て回教信者と做し、彼の一派カビール道者 (Kabir-Panthis) を以て、回教の分派と稱して居る。南印度の有名なる、マーラッタ詩人、マヒバチ (Marathipoet, Mahipati) は、カビールを稱して、"a yavana devotee" と記す。即ち回教信者の意であるが、然し、全く回教徒として了ふ譯には行くまい。現世の惡と、之を厭離して默想に耽るを妨げず輪廻轉生の說を信ぜるが如き、又暗々にカストを認め、諸神の崇拜をも竣拒せざりしが如き、此等は、明に印度教の影響と見ざるを得ぬ。殊に、彼自らは偶像崇拜を拒止し乍ら、グルに對する絶待服從を强要せし餘り、彼の入滅後、自ら崇拜の對象化された事は、興味有る出來事である。斯くて、カビール教派は、十二弟子に依て十二派に岐れ、ベナレスを中心に、北方印度西部印度にまで、多くの信者を得たと云ふが、此の派の聖典は、スクニダーン (Sukh-nidhān) と云ふ、カビールの流派中、偉人を缺がず就中、偉大なるは、ナーナクで、次は、十七世紀のプラーンナート (Prān-Nāth) 十八世紀のシバナーラーヤナ (Çiva Nārāyaṇa) 等で共に回教の感化に依て信仰の革命を叫んだ熱狂者である。

第三　ナーナクのシーク教

（一）　印度民族信仰の源泉は、吠陀に於ける古代の詩仙リシ（Ṛṣi）で婆羅門は、之が後裔として、唯一神人の仲介者を以て自任する、信仰と救濟の依所たるべき者である。其の婆羅門が神聖なる使命を打忘れて俗聞利養を渇仰し修道を閑却して迷信を鼓吹するに到つては、却つて、刹帝利種（Kṣatriya）以下の者にして、眞の求道生活に親しむ者の輩出を促した。之は、遠く、佛教以前から現はれた傾向であつて、近世に於ても此の例に乏しくない。ラーマーナンダの弟子には、多くの吠舍（Vaiśya）首陀羅（Śūdra）の階級より身を起せし者あり、カビール、亦、自ら織工の子たり。シーク教の創唱者、神秘的詩人としてのバーバーナーナク（Bābā Nānak）も亦商人の子に過ぎなかつた。彼は千四百六十九年、西北印度のパンヂャブなるアムリツァール（Amṛtsar）の北方、凡三十哩、卽ち、ラホール（Lahore）よりラビ（Ravi）河に沿ふて溯る事、四五十哩、河の東南岸に臨むデラ、ナーナク（Dera Nānak）附近に生る、幼時より毘濕拏派の經典を研鑽したと云はるゝを以て見れば、回教徒の家でもなからう。長じては四方に周遊し、回教徒と交はつて信仰を聞き、カビールの弟子に親しんで、又、カービルの後繼者を以て任じ

て居た。彼が亞剌比亞に旅して、メッカ(Mecca)の靈場を巡禮したに就いては、回教に心醉の餘り、教祖の遺命を奉ずる意味に於てなしたのであらうとも傳へられ又單に商用の目的を以て旅行したに過ぎないとも言はれて居る。何れにせよ、回教を以て印度教の遙に及ばざる者と心醉せるカビールの弟子と稱するを以て見ても、疾くにイスラムの風尙を愛慕して居た事は疑はれない。歸國の後は、自ら深く靈感する所有り、印度教の聖典を捨て、コーラン經を取らず、神を讃歎し、祈願を奉る讃歌を草し、以て之を弟子に傳授したのである。此の讃歌はグルムクヒ(Guru-mukhi)なる土語にて記され、能く俗耳に容り易く、忽ち多くの弟子と信徒を集め得たと云ふ。之をナーナクの根本聖典卽ち『アーディグラント』(Adi-Granth)と稱す。彼の滅後五十年程にして、後繼者アルジュンマール(Arjun Mall)の蒐錄纂收する所にかゝる。彼の宗教をシーク(Sikh)と名くるのは、グルの弟子と云ふ意で、カビールに習ひ、グルを神格化して、自らも之に服する弟子たるに過ぎずと思惟し、決して新宗教を稱へず、師の後を承けて印度教を改革する者と信じて居たのを、後の者、シーク教と名けた者らしい。シークは、梵語のシシュヤ(Çisya)、弟子に相當す。ナーナクがグルのシークなる語を讃歌中に用ゐて居る所から、弟子等は、ナーナクを唯一のグルと信じて、神格化し了り、その

弟子の團體てふ意から自宗をシークと呼ぶに至つたのであらう。ナーナクは、千五百三十八年、古稀の老齢を以て寂然と永眠した。弟子は彼をグル第一祖と崇め、次でグル第二祖アンガッド (Aingad) 三十四歳の壯年を以て法燈を紹ぐ。彼、グル位に在る事十四年、千五百五十二年歿して、第三祖アマルダス (Amar Das) 教團の中心となる。かく相傳してグル第十祖に迨び、グル相續を廢して經典の最高權威を以て代ふるに到つた。グル十代の事は、後に述べやう。要之彼は亂世に於て信仰の歸趣に迷ふた思想家である。回教王廳が千二百年代の始め、デーリ (Delhi) に都してより宗教、政治の實權を恣にすること二百年、王朝七代の交迭有りしとは云へ、北方印度は、最も回教の感化を受けしめられた。其の後を受けて、千四百年の頃、北方韃靼の酋長帖木兒は印度に侵入し來つてデーリを陷れ、戰亂の慘劇隨處に出現してより、印度に統一者なきこと百二十餘年、その亂世の暗澹裡に呱々の聲を揚げたのがナーナク其の人である。而して、彼が五十七歳の思想圓熟期に及んでこそ、漸く帖木兒六世の孫バーベル (Bāber) に依て統一せられ、莫臥兒王朝 (Moghal) をデーリに建設するに至つたので、身世忽忙の間、擾亂頻出の社會に人と成りし彼が信仰に、遁世氣分と寂靜主義の色彩有るは、亦、當然の勢と云つて宜い。彼の滅後弟子七派に分れたと云ふが主なる者に、マ

ルダナ(Mardana)及びバラ(Bala)がある。

(二) 然らば、ナーナクの開立したる宗教の要諦如何と云ふ事は當然起る問題であるが、其の大要は、カビールの夫れに對照して殆んど特筆大書すべき程の者を見出し難いけれども、興味有る中心問題であるから、左に教義及び之に關する要件を逐條說明する事にする。

(1) シーク教成立の由來、目的。——ナーナク自身は新に一宗を創稱したとの意識は無く、カビールの弟子に交つて著しく感化され、自らカビール教徒として、印度教の改革をなす者と信じ、回教の一神崇拜と團結牢乎たる教徒とに鑑みて、且つは、衝突頻繁犬猿も啻ならざる回教と印度教とを調和し、人心の安定歸一を知らしめんとしたのが、其の由來である。由來は軈て目的を暗示する。之が爲めには二教の長を取つて墮落せる土民を救濟せねばならぬ。故に、在來迷信の打破と理性に立つ清淨信仰道德の皷吹とに依て、人心の覺醒を目的とした事は云ふ迄もない。此の目的の下に集る者は、便ち、シーク教々團であつて、其の始めは、極めて安泰の裡に、幸福な發達を約半世紀續けたが、內外の事情は漸く多端となり、教會の性質は一變さるゝに到つた。蓋し、回教の鐵と、印度教の泥とは、到底、調和し難い間隙を持つて居たから、折角の苦心

にも拘らず、神性に就いても論述の明確を缺ぐ事を免れなかつた。之が、後年、教團變化の誘導となつた基因である。

(2)　所依の經典。――シーク教徒の最も尊重する聖典は、前述の根本聖典たる、『アーディグランド』(Ādi-granth)である。之は教祖歿後、第五代グルが纂輯した者で、其の內容は教祖ナーナクの讃歌等を主要とし、纂錄者自身の文や、遠くは、カビール、ラーマーナンダ等先師其の他數人の教義を包括した大部の聖書である。極めて神秘的で、容易に鮮明し難い部分が多いが、グル十世の間は、彼の說明に盲從したけれども、第十世グルの歿後は、『アーディグラント』其物が教團唯一の證權とされ、崇拜祈禱の對象と化し、今日まで、アムリツァールの黃金圍(Darbar-Sahib)大本山の中央に安置されて居る。『アーディグラント』(first book)の名は、後代グルの自著等に對して名けられたと云ふが、例之、第十世グルは、自己の意見をもつて教義信條の性質を一變せんとし、"Dasvē pātsāh kā granth"(the Book of the tenth Guru)を草したが、等しく後代同教徒の尊崇する聖典の一であるけれども、後代の者なるが故に根本經典と同一視するを肯ぜざる教徒もある。特に眞のシーク教徒は、今日尙ほ每朝諷誦怠らない祈願文に"Japji"(prayer)と云ふがある。

之も、ナーナク自身の眞作と信じられて、『アーディグラント』の初めに編入されて居る。

以上の三聖典は最も敎徒の崇敬する所で、一切の敎義は、之から湧き出る流に過ぎない。中には、印度敎の神々の名あり、回敎の神あり、婆羅門的民族信仰あり、理解さるゝ範圍に於ては、一神敎と云はんより、寧ろ汎神敎の觀がある。又グルへの敬從、神愛、淨道をも敎ふると雖も、信仰道德の奬策にこそ功有れ、思想としては、餘り語るに足らぬ者である。其の一班は、後に記す邦譯に依て想見すべく、反復重疊、行文流麗、能く印度人の特徵を發揮して居るのを見る。

(3) 唯一神の崇拜。——神の名は種々有るも畢竟唯一神、萬物創造の神に歸すると の考で此の神は全智、全能、萬物の上に運命を降し給ふ偉力は、世の何人も端倪臆測すべからずとす。而して、此の至上者に對する絶待服從と献身的絶待歸依の愛敬 (Bhakti) とが、救濟を得る唯一手段と考ふ。此の唯一神は、明に、回敎のアラー神から得た智識である。カビールを感動せしめたと同樣、ナーナクも之を取つて信仰の力を强むる賢策と信じた。一神をハリ (Hari) となす事あるより見ると、毘濕拏派の流を汲む事も明で、ハリ神の信仰は、源古くカビール前に發してナーナクに到り、毘濕拏派の

チヤイタニア (Caitanya) に至つては、ハリの唱名念誦の不思議力を信じて數十萬遍の稱念をさへなす者あるに及んだ。ナーナクの後、印度古代の名王、佛敎のコンスタンチンと呼ばれし、阿育王の、諸宗敎に對する寬容の態度に倣つた、彼のアクバル大帝 (Akbar) も、諸信仰を折衷和統して一大新敎を宣布するに方つて、亦、唯一神のみ世に存すべきを說いた。大帝の新敎樹立を助けた兄弟の詩人がある。兄アブルファイヅ (Abul Faiz) は、唯一神の精神を歌うて曰く、

『來れ、我等は光明の壇に向はん。我等はシナイの山の石を以て新しきカーバの礎を置かん。カーバの壁は破れたり。キブラの礎は滅びぬ。我等は新しき礎の上に誤なき城寨を築かん。』

又、弟、アブルファヅル (Abul Fazl) も、同樣讃して道ふ。

『神よ、我は何れの殿堂にも、人が汝を求むるを見る。何れの國語にても、人よ、汝を讃せよ、と云ふを聞く。多神敎も回敎も汝を感知せり。何れの宗敎も云ふ、汝は並びなしと。モスクには、人の祈禱を献ぐるあり。基督敎の寺には、人、汝を愛して鐘を打てり。』

以て、大帝が猶太敎、回敎、基督敎、印度敎等の諸信仰を叩究して唯一神の歸趣に到達せ

る讃美の情を見るべきである。斯る崇高な信念がカブール、ナーナクを流れて、彼に大成せられし事を想へば、シーク教義の感化亦侮る可らずと謂つて宜い。今ナーナクが、唯一神に對して如何なる思想を懷抱して居たか、又、印度教の神々を如何に稱して居たかを知る爲め、『アーディグラント』聖典中から、彼の詞を引用して見よう。先づ、神の表現としては、『眞名』(Satināmu)、『創造者』(Karatī)、『至高者』(Purakhu)、『至上者』(Niranijanu-Soi, Niranijanu-Hoi)、『離怖者』(Nirabhau)、『無怨者』(Nirakairu)、『無限の形を有する者』(Akālu-Mūrati)、『解脫者』(Ajūnī)、『自存者』(Saibhaiṁ)、『グル』(Guru)、『主』(Sāhibu)、『寬仁なる者』(Dātī)、『唯一人者』(Ika-dehi)、『諸德の住處』(Guṇī-Nidhānu)、『無形者』(Nirainkāra)、等の多くの名を以て神を讃禱し、又、印度教の神々としては、『イーサル』(Īsar; Çiva)、『ゴーラク』(Gōrakh; Viṣṇu)、『梵』(Brahmā)、『パールバティー』(Pārvatī)、『ミダー』(Midha)、『ピーラ』(Pīra)、『セクア』(Sekha)、『諸神』(Surinātha)、『牝牛』(Dhavalu)、『王者』(Pātisāla)、『因陀羅』(Indra)、『耶摩』(Yama)、等を擧げ、吠陀、其の他の印度教の民間信仰も、殆んど其の儘取り入れて居る感がある。然し、此等多くの名は、神の屬性、德力の諸方面を觀た讃歎の詞に止り、畢竟するに、唯一神に歸入する旨は、讃歌中、隨處に明である。其の他、『コーラン』經や、其の編纂者を以て、最も偉大なる神聖者に取扱つて居るを見ても、印度教や回教の影響の蓋ふ可らざ

るを證して居る。此等の點は、後『アーディグラント』邦譯を參照すれば瞭然とするであらう。

(4)　偶像排斥。――何等かの標徵(Symbol)を以て崇拜歸仰の中心點とする事は、宗教に共通な、人情自然の流露であるが、墮落せる宗教の崇拜對象は、往々無意義な偶像と化する事がある。若し偶像に依て表徵された眞の意義を捕捉して、之を崇拜する者あれば、又、必らずしも排斥すべきでないけれども、偶像その者が信仰の唯一對象であると盲信するに到つては、諸種の迷信的弊害忽ち起るのである。印度民の迷信に捉はれ、狡獪なる婆羅門の利用する所となり、神像の病、債務、獄苦、等を口實にして無辜の民の錢財を絞る例、今も昔も、殆んど變りはない。カビールが、印度教の偶像を拒斥し、婆羅門の狡智を罵倒し、寺院、殿堂の虛飾を痛難したのは、之が爲めであり、ナーナクが偶像尊崇の迷夢を破らんとしたも、亦、之が爲めである。偶像は方便であるが、無智の徒は、方便を直に目的の如く盲信す。盲信の結果は、形式に捕はれ、石塊木片の爲めに命を献ぐるに至る。誠に、偶像の排斥は、回教に於ても、最も力强く主張されし所であり、天地間唯一神を認むる者は、彼此我他の個別的偶像に捉はるゝ必要がないから、印度民の神像尊崇を以て愚民の夢戲と譏謗したのである。ナーナクは之に倣ひ、唯

一神の尊崇を叫びし傍ら、極力、此の形式拘泥を退けたのである。而して、如何なる名に依て稱念せらるゝも、神は唯一體なるが故に、同一に歸趣する事を讃歎して居る。佛教に在つても、其の始めは、婆羅門を敵視せず、生天の民族信仰を妨げず、要は唯、之を方便として後、我が教に導入せんとしたに過ぎなかつた。此の寛容の態度は阿育王の詔勅に能く體現されて居る。後年印度教に偶像崇拜の習性漸成するに於ても、其の感化交渉の密接であつたと思はるゝ密教の如きは、盛んに偶像形式論を議して居る。然し、佛教の偶像は、其の由來を尋ぬれば、方便に外ならないから、一概に迷信であると排拒する事はならぬ。ナーナクの退けた所は、方便を知らずして、目的其物と迷信する邊に在る。

(5) 婆羅門的迷信打破。——吠陀を排し、シャーストラを退け、荒唐無稽のブラーナを痛罵し、自ら尊大誇號する婆羅門を冷笑する傾向は、ナーナク以前から回教的感化の間に蒸成されつゝあつたが、特に、彼に至つて明確な火花を散らす樣になつた。此等は、皆舊來の陋習で幾千年來無意識的民族信仰の惰性として存して居た。之が墮落しては、無意義の祭犧呪文行はれ、煩鎖なる儀式と不可解の祭文に財物を費し、時間を浪費し、形式拘束の弊其の極に達す。ナーナクの難せし所、蓋し當然である。彼の

後、百三十餘年グル第十世の教徒に强要した勅命に、

"If you meet a Muhammedan, kill him; if you meet a Hindu, beat and plunder him."

とあるが、以て、如何に回教徒と印度教徒とを嫌忌したかを想ふに足る。

(6)　教團の四民平等。――神は人の上に人を作らず、人の下に人を作らずとは、佛蘭西革命の動機となつたモットーであるが、回教でも、基督教でも、當時、印度に在つた外教徒は、印度の民の四姓階級の拘束を笑はぬ者はなかつた。神の前には、萬民平等で、教僧も門閥に據る可らずとは、ムザルマンの確信であつた。カビールも、ナーナクも、唯一神の立場に立つからには、四民平等を認むるの、最も穩當なるを知つた。夫れは、唯一神が信仰を統一する力有ると同時に、教徒の平等が、教團の和合結合力を一層鞏固にするからである。佛教も、耆那教も、古くから教徒に社會的階級を以て臨む可らざるを說いた。其れが此處に復活したとも見られる。カスト(Caste)の習性は、由來太だ古いが、年と共に弊は愈々加はり、幾度か一部の改革者に排斥されつゝも、今日猶ほ依然として數百の階級的組織を有する。現今、北方印度の夫を以て南方印度に比較すれば、回教や、カビール、ナーナクの感化に依てか、前者は遙に弊の少なき現狀を見る。但し、シーク教も、後年教團が獨立の一國家を形成するに至つては、政治的方便と

して、カストの存在をも認容するに至つた。然し、近代の新宗教運動たる梵協會も聖協會も、カスト否認を以て教義の要綱中に數へて居るを見れば、漸く覺醒しつゝある印度の民が、新眞信仰に活きんとする活躍が想はるゝと思ふ。ナーナクも、實に、カスト否認を標榜する事に依て、無辜の民を塗炭の苦界より救濟する唯一直接手段と信じ、由て以て、教團の隆昌を預想し得たのであつた。亦、賢明なる哉と言つて宜い。

(7) グルの信仰敬從。――シークの教團、若し斯の如く、四民平等にして、祭式典禮を廢し偶像を捨てゝ、一切聖典を顧る勿れと云はゞ、或は、全く統一なき烏合の衆に非ずやと疑はれるかも知れない。之が爲めには、教團の中心として、グル (Guru) に對するシーク (Sikh) の絶對服從を强要する。教師に對する徒子の絶對敬服の義である。グルは實に唯一神格の化現で、彼は人の詞を發する神である。之に依て教團の統一は容易であるが、ナーナク自らも、他人に向つて始めから、我に盲從しよと命じた譯ではない。人は冷靜に、一切を打忘れて、先づグルの說法を聞き、理性を以て是非を判斷し、愈々正眞是諦の教であると合點するや、以後は、絶對にグルに信順するを要すると教ふるのである。回教のムハメドに於ける、基督教の基督に於ける、亦、シーク教のナーナクに於けると同じ關係で、彼は自らグルとして教徒に臨んだ。但し、此のグル信

仰の風も、由來する所古く、元は、印度教毘濕拏派の信仰に起り、カビールを經て、彼に到り、之が近代に流れては、造物主信者、カルタービハージ(Kartābhūj)なる一派に及び、グル以外何等崇拜すべき神を認めざる程になり、引いて、聖協會にまで採用されて居る狀態である。何れの宗教に見るも、教祖を尊崇するは自然であるから、グルの信仰も珍らしくないが、獨り、十八世紀初めに出でし、シバナーラーヤナ(Çiva-Nārāyaṇa)のグル服從信順を排斥せる例外は、注意に値する。グル專横放恣の一面が、斯る一角に表はれたを想へば、宗教の維持ほど困難なる者はない事が判る。

8) シーク教團――カストの拘束に滿足せざる者、印度教の頽敗に忍びざる者、回教の政治的宗教的壓迫に堪えざるの徒、彼等は職業の如何を問はず、走つてナーナクが新宗教の避難所に集り、或は弟子となり、或は、在家の信者として、何れも新福因に歡喜した。之れ則ちシーク教徒の團體で、グルの絶對服從を誓ひ、清淨なる信仰道德を嚴守するを以て特徴とす。彼等が毎旦、神に獻ぐる讃禱は、ナーナクの當時より行はれし者なるべく、教徒團結力の强大なる。教祖の豫想以上の結果を齎すに到つた。第五世グルの殉教するや、之を繼いだ第六世は、回教に對する必要から劍を取つて立つの止むなきに到り、其後數度の法難殉教に際する毎に、軍國的氣分と好戰的凶暴性と

を次第し發揮し、後には、教徒は悉く軍人とまで化した。その教團性質の變化推移は、後に述んも、ナーナク自身は、寧ろ神秘的な寂靜主義家であつたのである。又、回教徒に在つては、聖地メッカの巡拜を以て教祖の遺命と信じ、畢生の希願として巡禮を樂しみ、一度之を終へたる者は、名の前にハヂ(Haj)の稱號を附して誇と信じて居る位であるが、シーク教徒も、第四世グルが、黃金閣の本山を築いてよりは、聖堂巡禮を以て重大な任務と信ずる樣になつた。十五萬餘の人口を有するアムリツァールの都は、之が爲めに生れた。今も、二百萬信徒の中心となつて居り、黃金閣の『アーディグラント』聖典は、唯一崇拜の對象として奉安さる。其の他、教徒の信仰中には、回教、印度教の習慣が、不知不識の間に入つて居り、或は死後の裁判を信じ、或は、聖牛の崇拜尊重を怠らない等言ふべき點は多々あるが、略する。要之、教徒信仰生活の中心はグル一人に在るので、其のグルは神への愛敬(Bhakti)と、グルへの信心とを說くのである。澆季の世に在つて、人は自ら善行を積み、道力を修めて解脫を得可らず、唯、神を愛する專念稱名に依て祈るべき一途あるのみ、之が爲めにはグルの教說を信順して心の安泰を得身心を擧げて、神卽ち、グルに任ぬるの勇を要すと說く、故に、シーク教の神人關係は親子關係と云はんより君臣關係に近く、若し又、ラーマーヌジャの徒の二派、猿猴說(Mar.

kata-nyāya) 及び、猫把說 (Mārjāra-nyāya) の何れに近き性質を持つかと云はゞ、前者である。之も亦、回教的感化の結果で後年、好戰的國家を獨創したのも、遠因此に胚胎すと謂つて宜い。

以上の諸點はシーク教教義に關する要諦大綱であるが、之を一言に評すれば、印度教の礎の上に、回教の柱を樹てグルの天才を以て色彩した建物が、シーク教であると言へよう。

(三)　シーク教の心髓は奈邊に存する乎。曰く、『アーディグラント』聖典、之れである。上述の教義の要點が、如何に、宗教的天才の口を通して莊嚴な讃句となつて居るか、吾人は其の彷彿を得たい爲めに、原文對照の便を得る範圍に於て、左に和譯する事とした。此の『アーディグラント』の初めの部分は、所謂、祈願文 (Japji) 三十八章であるが、先づ此の中の最初、二十章丈けを拙筆を顧みず直譯して見やう。

『アーディグラント』(Ādi-granth) 根本聖典。

序讃偈。

唵。創造神は眞の名なり。怖れなく怨敵なき最高神なり。無限の形を持ち、輪廻轉生より解脫せる自存者なり。グルの恩寵に依りて (Guru prasādi) 〔神は理解せら

る。」

祈願（Japa）　第一章

其の初め眞理はあり、世界の初めより眞理はあり。ナーナク思之、眞理は存す、眞理は〔將來も亦〕存すべしと。假之、汝、百千度、冥想するも冥想又冥想に依りて夫は得られず。假之、我、不斷の敬虔（Iiva）を持續すとも沈默、又沈默に依りて夫は得られず。假之、我、山ほどの妙菓を得とも、飢えたる者の飢は止まず。千百千の巧妙者（器用者）あらんも一人も〔汝と〕共に往く者はあらじ。如何にして人は、眞の人と成り得るか、又、如何にして虐僞の墻壁は破らるべきか。ナーナク思之、〔神の〕命令意志の裡に歩むことは、〔總ての生物に〕記されたりと。〔神の命令意志の如く歩むべき運命の者なれば何人も取捨選擇の自由を持たず。〕

第二章

神の命令に依て形（萬物 Hovani）は作られたり、されど命令は語らるゝ能はず。神の命令に依て尊鄙あり、神の命令に依て苦樂決せらる。神の命令に依て或者は赦され、神の命令に依て或者は常に〔輪廻に〕彷徨ふ。ものみなは、神の命令の下にあり、神の命令の外には何物も無し。ナーナク思之、若し人、神の命令を理解せば、彼は

誇大自尊して語るを欲せじと。

第三章

若し人、かくなす力を持たば、彼は神の力を謳歌す。若し或る人、運命（nisiṇu神の與ふる福分）を知らば、彼は神の寛仁（Dāti）を謳歌す。或者は彼神の優越の美はしき讃歎を歌ふ。或者は學の不可思議なる思想を歌ふ。或者は歌ふらく身體を作りて後、彼神、又、そを灰に還らしむと。或者は歌ふらく、生命を取りて後、彼神、又、そを再び恢復すと。或者は歌ふらく、彼は近く現じ、又、遙かに見ると。或者は歌ふらく、彼は到る處、現前せざるなしと。かゝる物語は（Kathanī kathī）終に盡くべくもあらず物語り物語り物語りは千萬千萬千萬なり。（Kathi kathi kathi koṭi koṭi koṭi. 物語りの多きこと千萬無量なり。）彼神は斷えず與ふれども受くる者は倦めり。何時までも何時までも、彼等は食ふを止めず。司配者は（神の）命令を遂行して止まず。（命令を發すれば、立所に行はる。）ナーナク思之、彼神は拘はる所なく發展すと。

第四章

主は眞なり眞の名に於てあり（s'cu ni性質を示す）されど、此の詞の意味は無限なり。彼等は言ひ且つ乞ふ、與へよ與へよと、寛仁者は施物を與ふ。更に神の御前に

は何をか供ふべき、依りて以て彼の神廷が見らるゝ爲めに。口に依て如何なる語か話さるべき、そを聞きて彼神が慈愛を與ふる爲めに。早旦(Amṛtavelā晨朝神酒を献ずる時眞の名の偉大なることを省察せよ。神の恩惠より衣は來り、神の慈眼より(nadarī慈悲深き眼より)救ひの門はあり。ナーナク思之、かくて知られたり彼神自身こそ全く眞なることを。

第五章

神は任命さる可らず、何之彼は造られたるに非ず。彼自ら最高神なり。彼神を崇拜する者は名譽を受く。ナーナク思之、若し諸德の住處(神)讃歎されなば。若し彼讃歎され、聽從され、心に尊敬されなば。彼は苦を除いて家に樂を齎すべし。グルの口中(Gurumukhi)、歌あり。グルの口中、吠陀あり。グルの口中に絶えず含まれたり。イーサルはグルなりゴーラクはグルなり、梵はグルなり、且つ、母パールバティーも〔然り。〕若し我彼神を知りたらんには、我はそを云はん。されど物語は語らるゝ能はず。おゝ、グルよ、我に唯一神を知らしめよ。一切生物の唯一寛仁なる保護者を我れ忘れざらんが爲めに。

第六章

若し我、神意に召さば、(神を喜ばしめば、)我は神聖浴場(Tirath 印度教徒が沐浴して身垢罪業を淨むる靈水)に沐浴す。神の意志なくば、我沐浴を以て何かせん。我が世間を見る限り、(我の知る限り、)我の欲する何物か運命無きものありや。若し汝、唯一グルの教を聞かば。我が教中、寶玉あり、紅玉あり。おゝグルよ、我に唯一神を知らしめよ。一切生物の寛仁なる保護者を我れ忘れざらんが爲めに。

第七章

若し人の齡、四劫又はその十倍も續くとも。若し彼が九方(全世界)に於て知られ、若し各人が彼に服從するも。若し彼、美名を保持して、世に高評と令名とを博せんも。彼にして若し、神の恩寵を被ることなくば、何人も彼に付て一語を發せざるべし。彼を小人とせる諸小人の中に、彼は犯者に罪を歸す。ナーナク思之、彼神は惡人に恩惠を與へ、彼神は善人に恩惠を與ふ。彼神に恩惠を與へ得る如き者は、世に絕えて見らるべくもあらずと。

第八章

(神の語を)聞くことに於て、諸のシッド、ピール、及び神々あり。聞くことに於て世界、聖牛(dhavala 地球を支持せりと信ぜらるゝ牛)及び天空あり。聞くことに於て

天國及び地獄あり。聞くことに於て死は彼等を襲ふ能はず。ナーナク思之、神の崇拜者は常に安樂なり。聞くことに於て苦と罪との消滅ありと。

第九章

聞くことに於てイーサル、梵、因陀羅あり。聞くことに於て口中讃頌あり。聞くことに於て瑜伽の熟練あり、體中神秘あり。聞くことに於てシャーストラ、スムリティー(Smriti)吠陀あり。ナーナク思之、神の崇拜者は常に安樂なり。聞くことに於て苦と罪との消滅ありと。

第十章

聞くことに於て眞理、滿足及び神智あり。聞くことに於て、六十八神聖浴場の沐浴あり。聞くことに於て、彼等は反復熟讀に依る名譽を得。聞くことに於て、彼等は喜んで冥想に身を委ぬ。ナーナク思之、神の崇拜者は常に安樂なり。聞くことに於て苦と罪との消滅ありと。

第十一章

聞くことに於て一切德具者(Saraguṇa; Avatār)の讃歌(Giha)あり。聞くことに於て、諸のセーク(Sekh)ピール、及び諸王あり。聞くことに於て盲者は道を見出す。聞

くことに於て深淵は淺瀨となる。ナーナク思之、神の崇拜者は常に安樂なり。聞くことに於て苦と罪との消滅ありと。

第十二章

神を念ずる者の救濟(狀態)は語らるゝ能はず。若し語らば、彼は後に之を悔ゆ。よく筆紙書者の〔これを盡すもの〕なし。彼等は坐しつゝ神を念ずる人を省察す。斯の如きは最高神の名なり。若し人、彼神を念ずれば、彼は心中、神を知る。

第十三章

若し彼、神を念ずれば、容智と聰明、心に到來す。若し彼、神を念ずれば、全世界の智慧を得。若し彼、神を念ずれば、彼は現前に打破られず。若し彼、神を念ずれば、彼は閻魔(yama 死の神)と俱に往かず。斯の如きは最高神の名なり。若し人、神を念ずれば、彼は心中、神を知る。

第十四章

若し彼、神を念ずれば、彼は路上に遮られず。若し彼、神を念ずれば、彼は名譽ある令名を博す。若し彼、神を念ずれば、彼は誇氣に彼の道を行かず。若し彼、神を念ずれば、彼は德に就いて得るところあり。斯の如きは最高神の名なり。若し人、神を念

ずれば、彼は心中、神を知る。

第十五章

若し彼、神を念ずれば、彼は救濟の門を見出す。若し彼、神を念ずれば、彼はその家族の支持者たり。若し彼、神を念ずれば、彼は救はれ、且つグルの弟子(gura sikha)を救ふ。若し彼、神を念ずれば、ナーナク思之、彼は乞ひて彷徨ふことなしと。斯の如きは最高神の名なり。若し人、神を念ずれば、彼は心中、神を知る。

第十六章

五者は受取られ、五者は勝れたり。(五者 panica とは、地水火等の五大か正義等の五德か、神に從ひ、神に眞實に、神を讃する、等の五人か、諸說あり、シーク教徒も知らず。)五者は神の入口に於て名譽を得たり。五者は王門に於て輝けり。五者の思想は唯一グルなり。若し人語らば、彼は省察す。創造者の作す所は計り難しと、(無量なりと。)聖牛は信心と慈悲との子なり。彼に依りて多く滿足は安立せらる。若し人、これを理解せば、彼は眞理の人となる。如何に多くの負擔が聖牛に置かれたりや。世界は尙ほ更に有り、稍々距つて更に、又、更に有り。如何なる路がそこにありや、又、如何なる力の下にありや。生物の類は多し、色の名は多し。萬物の運命、〔そ

の中に於て神の〕筆は動けり。若し人、此の物語りを書く術を知らば。如何に偉大なる物語の書かるべきぞ。力は如何に多くありや、作られたる美は如何に。寛仁は如何に多きや、何人か食を知れる。光景　(pasāu)　は一語に依て作られたり。此より百千河湧出せり。神の力とは何ぞや、神の思想とは何ぞや。我は一時に、それに到達(理解)すること能はず。汝を樂しましむる者は何ぞ、そは卽ち善行なり。おゝ形無き者(神)よ、汝は常に安泰なり。

第十七章

〔神の御名の〕無數の復誦、無數の尊崇あり。無數の崇拜無數の嚴肅の熱光あり。書籍(garantha)及び吠陀の無數の口誦あり。無數の瑜伽行者あり、彼等は常に自心中に籠居す。無數の崇拜者あり、神性智を熟考す。無數の峻嚴あり、無數の寛仁あり。無數の英雄あり、面と向つて相戰ふ。無數の沈默せる敬虔者あり、絶えず冥想す。神の力とは何ぞや、神の思想とは何ぞや。我は一時に、それに到達する能はず。汝を樂しましむる者は何ぞ、そは卽ち善行なり。おゝ形無き者よ、汝は常に安泰なり。

第十八章

無數の愚者あり、全然盲目たり。無數の劫賊あり、不義の報酬に活く。無數の司配

者あり、暴行を敢てす。無數の惡漢あり、殺人を敢てす。無數の罪人あり、罪を犯す。無數の虛言者あり、虛僞を撒布す。無數の蠻民あり、汚物を貪食す。無數の讒譏者あり、頭上に重荷を措く、(自己又は他人の頭上。)ナーナクは低き思想を語る。我は一時にそれに到達する能はず。汝を樂しましむる者は何ぞ、そは則ち善行なり。おゝ形無き者よ、汝は常に安泰なり。

第十九章

無數の名あり、無數の場所あり。到達し難き、無數の世界あり。無數にして彼等は讃辭を云ひ、下向の頭を以て支へらる、(智力の全力を竭して、御名を念ずる彼等は無數にあり。)文字の裡に御名あり、文字の裡に讃歎あり。文字の裡に智識、讃歌、功德の讃辭あり。文字の裡に記錄、談話、言語あり。文字の裡に出來事の記述あり。此等の文字を書く彼その人(神)の上には運命なし。左れば、神は命ずるに隨つて、かく彼はそを得。彼神の作す所 (Kitā) 有らん限り、名も限りなし、(作す所の一切に名を與ふ。)名なくば何處にも場所有るなし。神の力とは何ぞや、神の思想とは何ぞや。我は一時に、それに到達せず。汝を樂しましむる者は何ぞ、そは則ち善行なり。おゝ形無き者よ、汝は常に安泰なり。

第二十章

若し手、足、體の汚れたらんには、水を以て洗はれて、汚れは去るべし。若し尿に依て衣汚されたらんには。石鹼を用ひて洗はれ得べし。若し心、罪を以て汚されたらんには、神の御名の染料中に洗はる。德と罪とは單に名のみに非ず。業を作して後、彼等は(自ら)そを書き下す。彼等は自ら種蒔き、自ら收穫す。ナーナク思之、神の命令に依りて、彼等は來り、且つ去ると。(以下略)

以上は、シーク敎徒が每旦口誦する新願文の前半であるが、以て如何に、印度民族信仰と回敎的色彩とが混入されて居るかゞ判らう。例之、第一章には、唯一神の信仰と絕待服從の氣分を歌ひ、第五章には多くのヒンヅー神々を出し、第六章には、神聖浴場の靈浴信仰を引き、第八章には聖牛の崇拜を出し、第九章にも、諸神吠陀、等の舊來信仰を語り、第十章には六十八の靈浴場を以て眞理の有る者とし、第十五章には、『若し彼、神を念ずれば、彼は救はれ且つグルの弟子を救ふ』(Sainai tarai tāre guru sikha)とて、シーク敎の名の由て出づる所以を明にし、第十六章は、ナーナクのコスモゴニーを說明した者と云はるゝが、又、聖牛を讃して居るを見る。牛は印度の民の唯一必須の財であつた。彼等の生活には牛なくしては進み難い環境があつた。戰爭と云ふ字は、牛

を奪ひ合ふてふ義から成つて居た程、彼等の專ら重んずる所であつたから、民族信仰となつて現代まで持續されて居るも無理はない。然し回教徒は此の信仰を冷笑し、祭には必らず牛を犧牲に供へた。印度教と回教との信仰衝突の火花は、先づ此に爆發したのであつた。シーク教は、兩教を調和せんとしたが、尙ほ聖牛の崇拜を全く捨て得なかつた而耳ならず、曾て、千七百六十二年、ラホールの回教王アーメッドシャー(Ahmed Shah)が牛を殺して黃金閣を繞る甘露池(Amṛtsar)の中に投入した時、シーク教徒の憤激一方ならず、ランジットシング(Ranjit Singh)は大軍を將ゐて回教徒に復讐し、多くのモスクを破壞して黃金閣の裝飾用に供したと傳へられて居る。祈願文の三十八章中、殘りの部分から尙ほ最も注意すべき重要な文句を抄出して見ると次の如き者がある。

第二十一章(前略)

時とは何ぞ、期とは何ぞ、月の日とは何ぞ、又週の日とは何ぞ。季節とは何ぞ、又、月とは何ぞ、何時、世界は創造されしか。賢者(pandit)も見出さゞりき、若し見出したらんには、彼等はプラーナ(purāṇa)中にそを記錄せしならん。或は又、カヂス(Kazis回教聖典コーラン經筆者)もそを知らざりき、若し知りたらんには、彼等は、コーラン中に、

そを記錄せしならん。或は又、瑜伽行者も、其の他何人も月の日、週の日、季節、月を知らざりき。創造神が世界を作りし時は、神、自身のみ之を知る。おゝ神よ、我は如何に汝を呼ばんか、我は如何に汝を讃歎せんか、我は如何に汝を記さんか又、如何にして我は汝を知らんか。（後略）

第二十二章

數百千の天國地獄あり。人々は遂に神の限りを探すに倦めり、吠陀は唯一事を說く、神は限りを持たずと。數千のプラーナもムハメッダの聖典も說く、實際世には唯一の原理（神）のみ有りと。若し神が記錄に依て說述されば、されば神を說け、されど斯る說述は不可能なり。ナーナク思之、神を偉大なりと呼べ、神の如何に偉大なるかは、神自身のみ之を知ると。（後章凡て略）

跋讃偈（Slak）

空はグルなり、水は我等の父、大地は我等の母。日と夜とは我等の二傅育者たり、この男女は全世界を樂しくす。功禍はやがて判官の面前に讀み上げらるべし。人は業に依て、或は神に近く、或は遠し。御名を稱念し、勤行を完修して逝ける人々は。ナーナク思之、彼等の容貌は光明を與へられん、彼等と俱に救はるゝ者、果して幾多

ぞと。（以上、祈願文終り。）

天地唯一神の觀念、嚴肅なる宿命說、並に死後の裁判の思想は、回教の心髓とする所、シーク敎も亦、之を採用して、己が信條の錦に織り出せるを見ずや。最後の審判を信じ、業報因果を執し、功禍善惡の自ら種蒔き自ら收穫するを敎ふるは、軈て、グルに信服して、彼が命ずる信仰道德の固守となる。一夫多妻は回敎徒の恬然として耻づる無き所であつたが、カビールやナーナクの嚴格なる倫理觀は之を峻拒した。現に南方印度の土民間には、今尙ほ、兄弟二人にして一人の共通妻を有し、或は兄弟二人にして二妻を迎へ、時あつて之を交換相樂しむが如き破倫の蠻風が行はれて居るが、北方印度には殆んど此の種の類例を見ない。清新なる信仰道德の皷吹が、或は、斯る方面にも全く影響して居らぬとは云へまい。

第四　ナーナク以後のグル十世

ナーナクの傳紀に就ては、何等信憑するに足るもの、今日に傳つて居らぬ。彼は千四百六十九年に、デラナーナク附近のタルワンディー（Talwandi）に生れたこと丈は明であるが、其の歿年には二說あり、或は千五百三十八年と云ひ、或は三十九年と云ふ。

兎に角、凡そ七十歳で果てたのであるから、假りに、彼の新信仰宣言が五十歳の頃とすれば、千五百十八年の頃で、二十二年間グルの位に在つた譯である。彼が歿してより、子孫、親眷、相繼承してグル第十世に及ぶまで、此の間、凡そ二百五十年である。最初の百年は極めて平和の裡に、漸次教團の幼芽を掬育涵養しつゝ希望の光に歡喜して過ぎた。此の頃から後度々の迫害にグルの信仰的平和は搔き亂され、信條は變り、教徒は本來の蠻勇を發揮する機會が多くなつた。教徒の口には、今日尙ほ多くのグルの奇蹟が傳へられて居る。教養ある者は、其の儘信ずる人はないが、奇怪な傳說の中には、核心たる史實を持つて居る。此の凡百五十年間の出來事多き教會史は、凡ての宗教運動に附き纏ふ圍境との衝突を、最も興味深く物語つて居る者であるから、吾人は、シーク教の現狀を述ぶる前に、一言、之を略說して置かねばなるまい。

グル第一世ナーナク——彼教祖は、元パンヂャーブの一寒村に生れたベディカトリ、カスト (Bedi khatri caste) のヒンヅーである。彼の人格は二方面より觀らるゝ。後代に及ぼした勢力感化の特に偉大なる者あるより觀れば、宗教的天才である。然し、カビール同時代の多くの宗教改革者が、等しくイスラムの感化を受け、印度教の偶像を排斥し、婆羅門の尊大と儀式とに反抗した點に於て、殆んど同趣同好の信仰運動の

一端に、ナーナクが現はれたとすれば、何等偉大なる人格を認むるにも及ぶまい。シーク教の隆盛は寧ろ彼の後繼者の努力に負うて居る。特に、軍國的、政治的、獨立共和組織となつたのは、ハルゴビンド (Har Govind) 及び、ゴビンドシング (Govind Singh) 兩グルの力であつた。然し、ナーナクの寛大な教義と、長き白髯を垂れた溫然玉の如き像とは、今日、教徒の最も追慕渴仰止まざる所で、復古的氣分の溢れた現狀から察すれば、亦、彼れ、常の改革者と異つた德性を具して居た事が偲ばるゝ。彼は、輪廻轉生の民族信仰を認めた。然し、夫は、人格を淨化して神に還元する必然の階段たるに過ぎない。カストを棄て、儀式を笑つたとは云へ、極力、辯難攻擊して一身の危きを顧みないと云ふ程の狂熱家でもなかつた。寧ろ政治組織上の便宜としてはカストを默認した。唯彼の求むる所は、神の前には人皆平等なりの觀念を信徒の腦裡に銘刻せしめんとするにあつた。其の他、印度教徒の信ずる聖牛は、彼亦尊重し、回教徒の厭忌する豚は之を避け、出來得べくんば、一切の肉食を禁止せんと欲したが、未だ、飲食物に就ての嚴制は强ひなかつた樣である。彼は、形無き神、名なき神を拜せしめた。其の信念は祈願文に表はされし如く、崇高な敬虔愼直の理性的直觀である。其の圓滿なる人格と、寬容なる態度と、崇高莊嚴な信仰とを想はざるを得ない。バンヂァーブの靈域到る處

彼の『グラント』と慈愛に滿ちた顏容とが、絕大の尊敬を以て崇拜されて居るのも無理はない。彼には二子があつたらしい。長子はグルの位を繼ぎ、弟のスリチャンド(Sri Chand)は、苦行者の一派を作つてウダーシー(Udāsi)と云ふ。尙ほ、シーク聖典の言語に就いて一言して置くが、經典は廣汎なもので、ヒンヅー、ダイアレクト(Hindu-dialect)であると云ふ。ナーナクの信仰は、『アーディグラント』に盡きて居るが、敎徒は自ら之をグルの金口(Gurumukhī)と稱す。但し此の言語は、トランプ氏(Dr. Ernest Trumpp)の所說によれば、決してヒンディー(Hindī)ではなく、恰も、中世のヒンドゥイー(Hindui)から、現今のヒンディーが來て居る如く、『アーディグラント』は、オールド、グルムクヒー(Old Guru-mukhī)とも稱すべき性質の者で、近代のモダーン、グルムクヒー(Modern Gurumukhī)は、之から推移し來つた詞だと云ふ事である。便ち、『アーディグラント』はヒンドゥイーでもなく、敎徒獨特のオールド、グルムクヒーにして、第十世グルの『グラント』こそ、眞正なヒンドゥイーだと云ふのである。何れにせよ、敎祖が、時代の普通語と多少異つた詞を用ふる事は、豫言者にあり勝ちな例である。然し、同代の人々は、よく說法のまに〳〵理解し得たに違ひない。容易く里耳に容るは、一般信仰を勝ち得る有力な要素である。印度の大乘佛敎徒が民間信仰の實際を忘れて高遠

幽妙な哲理の考究に沒頭したと相對し、婆羅門は專ら卑近な信仰を皷吹して民間の實力を得るに努めたのは、宗教史上の最も興味ある運動であつたが、ナーナクは、後者の系統に出て、又、同樣の運動を企てた一人である。其の原理は淸淨に、教義は單調に、訓ふる倫理は容易く、實行的であつた。社會の如何なる階級からも、職業の尊卑を問はず、男女の老幼を論せず、回教と印度教に苦しめられし善男善女が、新信仰に蕩然と投じ來つたのは、蓋し所以ある哉である。然し、理論の宗教は民族の境界なきに反し、實際の信仰は民族の外に出る事はない。佛教の教理が異域に發達し、婆羅門教、シーク教の類が、民族内に限られたる、蓋し之が爲めであらう。

グル第二世アンガッド (Aingad)——千五百四年に生れ、三十四歳にしてグルの位に卽き、千五百三十八年より、五十二年まで、十四年間教團の中心に在つて壯年歿す。

グル第三世アマールダス (Amār Dās)——千五百九年に生れ、四十三歳にして、アンガドの後を繼承し、千五百七十四年の歿時まで、二十二年間、教徒を率將す。教勢は漸次隆運に向ひつゝ發展した。

グル第四世ラムダス (Rām Dās)——千五百三十四年に生れ、四十歳にして、グル位を次ぐ。彼れ、教徒信者の漸く增大するを見、中心勢力を具體化するの必要を感じ、卽位

の年千五百七十四年に、地を相して大寺院を建立せんとし、現今のアムリツァールの地に甘露の池を發掘した。其の中央には殿堂建築の方地を存し、ハルマンダル（Har Mandar）の殿堂を設け始めたが、遂に完成に到らず、七年の後、千五百八十一年四十七歳の壯年を以て他界した。此の地は、元、アクバル大帝より賜ふ所で、池を、アムリタサラス（Amrita-Saras）卽ち不死の池、甘露池と命名せしより、後年、敎徒雲集して都市をなすに及び、アムリツァールを以て都名となすに至つたのである。此のシークのメッカたる都は、グル四世が畢生の努力に根差した都である。

グル第五世アルヂァン（Arjan）――或はアルヂュン（Ajun）とも、アルヂァンマル（Arjan Mal, Arjun Mall）とも、アルヂァンダース（Arjan Dās）とも云ふ。千五百六十三年に生れ、十八歳の若年を以て、グルの位を受け、二十五年の間、敎徒を統帥して一大勢力を樹立し、多くの事業をなして千六百六年、四十三歳の壯年を以て登仙す。彼が不朽の遺業の第一は、何と云つても、敎團信條の確立たる、『アーディグラント』の編纂であらう。之は、ナーナク敎祖の祈願文を最初に置き、カビール前後の、同傾向を負びた印度敎の改革者數人の詞を編入し、併せて、自己の信仰をも補入した根本聖典であること、前述の如し、斯る大部の編纂は一朝一夕の仕事でなく、相當長年月苦心の結果に違ひない。

のみならず、彼は、卽位の早々、ハルマンダルの大殿堂を完成した。之はシーク敎徒、巡禮の中心となり、爾後凡そ百五十年、回敎王アーマッドシャー（Ahmad Shāh）の爲め、二代の苦心、空しく烏有に歸せしめられたのが、千七百五十四年であつた。若しナーナクを開祖とすれば、彼は實に中興の敎祖である。グル五世に依て、始めて敎團の組織完全した者と云つてよい。アルヂャンの靈、今はランヂートシング（Ranjit Singh）なる、敎團最後の花形と倶に、ラホール市郊外に永眠して居る。特に、彼に就いて注意すべきは、回敎王ゼハンギル（Jehangir; Salim）の反感を被り、シーク敎團の勢力を嫉まれて、遂に該敎最初の殉敎者とされた事である。天來の一擊、法難の驚愕は、全敎徒を震撼した。憤慨は報復の念となり、自守は劍を持つて立つ事を要求した。敎團の性質、今や漸く惡化せんとする際に臨み、新にグルに卽いだのが、

グル第六世、ハルゴビンド（Har Govind）——その人であつた。彼は千五百九十五年に生れ、グルを繼いだときは、恰も十一歲の幼年に過ぎぬ。其の千六百四十五年、感慨無量の一生を終るまで、三十九年間の奮鬪的生活は、敎徒の性格に一致して、能く勢力の維持と、回敎王朝への反抗とを持續した。敎徒は今や劍戟を持つて起り、青年グルは、勇を鼓して之を統率した。彼は實に最初の武將である。ラホール政廳の回敎王

は、此の國家の公敵に對して何ぞ默視して居やうぞ。大軍は度々襲來した。シーク教徒は衆寡敵せず、遂に故鄕を追はれて、北方山地に難を避く。武器を集め、蠻勇を鼓舞し、グルの絕待命令は此に軍隊的訓練に應用さるゝに到り、內、擾亂を防ぎ、外、莫臥兒王に對し、如何ともして教勢の恢復增大を勝ち得んとの念は、グル畢生の志願である。平和の天地に在つては、カビール教徒と殆んど選む所無かつたとは云へ、今や、パンヂァーブの民は立つて本色を發揮するに到りストレッヂ(Sutlej) 河流の源溪、山間僻遠の地は、自ら好戰的共和國の本據と化した。教團は政治的國家と化し、グルは、『グラント』を以て靈界の權威を示し、大劍を以て物界の統帥を標示するに到つた。現に、アムリツアール黃金閣側のアカルバンガ(Akal Bunga) 休憩堂の一室には彼の王座と二本の劍と多くの武器とが傳へられて居り、『アーディ・グラント』は、每夜半四時間必らず此の一室に安置さるゝと云ふ。彼の一子、アタルライ(Atal Rai)は、友の死を悲んで追慕殉死したが、父は悲みに忍びず、七歲の登天を記念する爲め、ババアタル (Babu Atal) 七層塔を建立した。今に黃金閣の側に、三百年の昔を語り氣に高く聳えて居る塔が之である。彼れ亦、武斷、一片の情を懷く英傑たりしや、明である。

グル第七世ハルライ (Har Rai)——或は、ハルキシャン (Har Kishun) とも云ふ。前グ

ルの孫に當る。千六百三十年に生れ、十五歳にしてグル位を紹ぎ、二十六年の後、千六百六十一年登遐す。

グル第八世ハルクリシュナ (Har Krishna) 或は、テーグバハドゥル (Tegh Bahadur) と云ふ説もある。千六百五十六年に生れ五歳にしてグルとなる。三年の後、千六百六十四年、デーリー (Delhi) にて歿す。内憂外患の頻發せし當時、幼主の擁立は意味有る事である。思之、此等二代の間も、回教王朝に對する野心と、教徒の軍隊的訓練とは、怠らなかつたらう。

グル第九世テーグバハドゥル——(Tegh Bahadur) 或は、ハラー (Harah) とも傳へて居る。千六百二十二年に生れ、四十二歳にして、グル第九代の位を受く。在位十一年の後、千六百七十五年、莫臥兒帝アウランングゼブ (Aurangzeb) より、内亂罪の名の下に刑戮せられた。ハルゴビンドが劍を執つて教徒を指揮してより、此に七十年、鋭鋒は脾肉の嘆に堪えず、悶々の勇士が、一齊に立つ時は來た。軍國的氣風は全くシークの本質と化した。此に一大戰火の交へらるべき機運に逼つた事、見るべきである。元來、グルテーグは、英氣衝天の概あり、世界を化して一舉シーク王國と成さん野心があつたのに對し、時の回教王は、利を見て義を知らざる殘忍熱狂の暴君と來て居る。兩者間

の衝突は、鐵石自ら火を發するの結果に陷り易い。彼の有名な大理石の殿堂アグラ(Agra)のタヂマハール(Taj-mahāl)を作つて戀の昔を偲んだシャーヂァハン(Shāh Jahan)王、の長子に、ダーラーシュカー(Dārā Shukah)なる君子があつた　彼は溫厚篤實の學者で、曾て、千六百四十年の頃、カシュミール(Kashmīr)滯在中、優波尼沙土(Upanisad)を波斯譯し、十七年を經て完成した事があるが、近世の歐洲印度學者が優波尼沙土哲學を知つたのは、彼の賚賜に外ならぬ。彼の弟に凶暴なるアゥラングゼブあり、野心を以て前後を顧る遑なく、千六百五十九年、兄を弑して自ら王位を簒奪す。兄を殺す蠻行を恥ぢざる暴君の毒手は、軈て、シーク教王をも刑戮したのである。さらぬだに報復征討の宿志を糾合せるシーク教徒は、內外の刺戟に順應する爲め、全く教團を軍國とするの餘儀なきに迫られた。此の時、後を繼いだのが、幼主なゝ、

グル第十世ゴビンドシング(Govind Singh)――である。彼は千六百六十六年の生れ、父に次いでグルとなつたのが、九歲の千六百七十五年で、在位三十三年間の生涯は、空前絕後の奮鬪史を畫いた。彼の敵は回教王アゥラングゼブである。彼を倒し、莫臥兒帝國を亡ぼし、父の仇を報いんとしたのが畢生の努力で、此が爲めには、身親ら超人的魔力を感得するの必要を悟つたと云ふ。或は深山に隱れて苦行を修めたとか、弟

子の一人を殺して女神突伽を祭る犧牲に供へたとか、神力を得んため、敢て何物も惜み逡巡する所がなかつたとの噂が立つた。彼は、ナーナク以來の教義が、餘りに平和寂靜主義であるのを慨き、到底時勢の要求する所に非ずとして、自ら『第十世グルのグラント』(Dasné pitsah kā granth) を草し、好戰的氣象に滿ちた悲憤慷慨の信條を誦せしめ、教徒の團結を鞏固ならしむる目的を以て、各人の名にシング (Singh) 卽ち獅子の稱を通附せしめ、同一祖先の血を持つ事を自覺せしめた。特に、カストを極力否認せるを以て、教徒の數を增加し、此のシングの好戰的共和國をクッールサ (Khalsa) と呼んだ。之は阿拉比亞語のクッーリス (Khalis) から來た名で、信仰に關する、『淸淨教徒』の義である。此の軍國的獨立國は、後年、千八百四十九年、英軍に降るまで、百五十餘年間、多少の榮枯盛衰ありと雖も、よく莫臥兒帝國の末路を見屆け、英軍と相對峙して能く西北印度の面目を維持した。教團の好戰的態度は、ハルゴビンド以來代々の宗是として奉じ來つた所であるが、頻繁なる迫害に對抗する必要上、此の氣風を徹底させねばならぬ。信條を之に調和さす爲めには、變更を要する。何れにせよ、之は一人宗教者の能くする所でない。グルゴビンドは、先づ希臘人の立法家を招聘し、相計つて教團の組織を改め、教徒に向つて五大義務を要制するにいたつた。タナカナーマー

(Tanakhū-Nāmā)の書は、此等に關する倫理的社會的の本務を明にした者で、五大義務は又、"five Kakkas" とも言はる。(一)教徒は一日二回必らずターバン (turban) を整序すべし。之をカンガ (Kanga) と云ふ。(二)教徒は凡て毛髮、鬚髯、身體の毛を生長するに任すべし。之をケス (Kes) と云ふ。(三)教徒は武器を負びずして外出す可らず。之をクッンダ (Khanda) と云ふ。(四)教徒は一切タバコを禁ずべし。(五)教徒は、必らず『グラント』を讀むことなくして一日を過ごす可らず。右の四、五、の代りに、鐵の腕輪を負ぶべし (Kara)、及び、膝より上の短衣を着用すべし (Kachh) の二を置き『五K』と稱する。

此の『五K』の義務は、現今、グルゴビンドの軍國的シーク教に不滿を懷き、別に一派をなして、ナーナク教祖の精神を其の儘奉ぜんとした復古主義者の守る所であるが、尙ほ且つ、グルゴビンドの五大義務と餘程似て居る本務觀を持つて居るを見ても、教義變遷の時世的影響如何ともするなき狀を察する事が出來やう。斯くて、五大義務の遂行上、諸種の命令を發し、長官會議を開催して政治を論じ、回教徒と印度教徒とを嫌ふ事を誓はしめ、『モスレムに遭はゞ殺せ、ヒンヅーに會すれば掠奪せよ』と命じ、專ら、物心兩界の標徵として劍と聖典との崇拜を强ひた。劍と聖典を以つて立つたは、如何にも、イスラムに彷彿たる所がある。教徒の增加するにつれ、シングの同姓のみを

以ては結合し難い所から、衣服、態度をも世人と別ち、矩き青衣を着けて、必らず劍を負びしめ、教徒の子は、生れ乍ら、又は、灌頂式より、當然、軍人たるべきを強要し、劍を以て入園灌頂を行ふ例を始め、禮拜、儀式共に、世間の方法と相違せる新形式を創定した。剽悍決死の蠻勇を鼓舞した結果中には、餘りに信仰の本義を打忘れたる狂態を慨いて、竊に遁るゝ者もあつたが、服從に訓練されたる大部の教徒は、忽ち熱狂的となり、グルを仰いで莫臥兒王アッラングゼブを打破らんと熱中した。激戰は幾度となく繰返へされ、長き鬪爭の後、又、衆寡敵せず、多くの教徒は仆れ、根據地は奪取されゴビンドの母と子は殺戮され、弟子從者の主なるものは、或は手足を斫られ或は放逐され、其の慘禍洵に筆紙の盡す所でなかつた。アッラングゼブの死後、其の子バハドゥルシャー(Bahadur Shah)と和し、一旦兵力を恢復せんと企てしも、敗軍の將、兵事を語る勇無く、意外の災殃に意氣消沈し、遂に單身、莫臥兒領に漂到し、千七百八年、四十二歳の壯年を以てデッカン(Deckan)のナンデル(Nander)に於て横殺された。三十年の努力は水泡に歸し、回教討滅の宿志は遂げられず、父祖の仇は報いず、却つて身を亡ぼして祖師の怨恨を深めたに過ぎない。嗟乎、ナーナクの平和なる神愛の教が立てられしより此に二百年、此の血腥きグルの最後を見ず。否、シーク教徒の凶勇は之のみに留らず、ゴビ

ンドの歿後、曆一曆、狂暴慘禍を逞ふせんとして居る。何人か其の教義の變化教團の盛衰の太だしきに驚かざる者あらんや。グル十世の歿するや、以後グルの繼承を止め、『我が滅後、汝等は、主なる聖典(Granth Sāhib)をグルと仰げ、聖典は汝の問ふ所に答ふべし』と遺命した。シーク教のグルは此に終りを告げたのである。

第五　シーク獨立國時代

(一)　教徒は今やグルを失ひ、永久にグルを失ふて、遂に聖典崇拜の狂信徒と化した。殘忍慘酷の運命を嘗めし彼等は、臥薪嘗膽して教祖の重怨を雪がんと努めた。而も、グル十世の殉教後より五十餘年間は、尙ほ、回教王廳の壓迫絕えず、シーク、モスレム最後の大爆發は、古今未曾有の慘劇を展開せんとして居る。グルは無しと雖も、教徒の敵愾心は、到底統一を亂すを許さず、機を得て、百千の屈辱を報いんとした。此に、當然グルに代るべき首領の現はるゝの時機は來た。バンダ(Banda)驍將は、實に此の重大なる使命を負びて立つた犧牲者である。彼の、グルゴビンドが二子二孫、シルヒンド(Sirhind)の刑手に露と消へ果てしより三年、悶々快々の情、やるせなき彼は、ゴダーバリ(Godāvari)河畔に亡き子孫の後を追はんとするや、印度教の苦行者にして、今や彼の

徒子に改宗せるバンダ(Banda)蠻勇者を遣してシークの本據に到らしめ、後事を托し報讐を計らしむ。バンダ乃ち走つて急を告げ、クッールサの殘徒を糾合して先づ、シルヒンド知事ワヂールカーン(Wazīr Khān)を殺し、殺伐の將帥と勇猛邁進の教徒とは、全市を蹂躙し盡した。多くのモスクは破壞され、回教師は虐殺され、如何なる宗教的感情も彼等を制肘するなく、男女老幼を分たず殘酷に處し、町民は塵戮され、淫奔の蠻行は演ぜられ、敵の死體は、埋葬の者と雖も、發掘して鳥獸の貪食に委ねられたと傳ふ。此の慘劇は、シルヒンドを中心に、ストレッヂ、ヤムナ、兩河の東方各地に及び、後、河流の水源地に退いて精鋭を養ふた。勝ち誇つた教徒は今や回教王廳の勁敵となり、或は、進んで各地を侵略し、一軍、ラホール近郊を略し、他軍デーリの附近に到る。千七百十年バハドール帝は、大軍を率ゐて親征し、バンダは籠城久しきに亘つて孤城を固守したが、遂に糧食は竭きた。飢餓に頻せる城兵は、窮鼠猫を食むの勇を以て皆突進し出た。多くは殺され、捕虜は鐵籠に入れられて、デーリに送らる。バンダは變裝して身を脱し、ラホールに凱旋せる回教兵を後に見て、再起を企つ。既にして帝歿し、千七百十三年、ファロクシール(Farokhsir)帝卽位するや、三年の後、バンダ再び教徒を帥ゐて侵略し、敵を破つて蠻行、以前に增した。左れどバンダの武運は今や竭く。遂に、

アブドゥセメッド、カーン（Abdu sened Khān）の引率する莫臥兒軍に打破られ、多くのシーク教徒は殺戮せられ、バンダと七百四十人の從者は捕虜となつてデーリに送致された。彼等は黑衣を著せられ、同胞二千の首級を棒端に捧げ、駱駝の背上に縛せられて市中を巡行され、七日間に亘つて悉く刎頸されたと傳ふ。バンダは鐵籠に投せられ、色衣を纏ひ、赤頭巾を蓋ひ、從者の腥首を貫ける血槍裡に坐せしめられ、劍を取つて自ら其の子を刺さん事を强ひらる。其の應せざるや、軈て一人の回教徒は、眼前に子供を屠り、其の心臟を抉出してバンダに放擲した。斯くて後、バンダ驍將は、白熱せる釘拔を以て、身を寸斷さる。當時の悲慘なる光景は、デーリに在つた英國宣教師等の到底目擊するに忍びなかつた慘鼻の極と傳へられて居る。シーク最初の殉教者アルヂァンマルが回教徒に殺されてより、此に到るまで百年、グルの刑戮さるゝ者三人、バンダ今又、モスレムの手に仆る。クゥールサの徒が、此の後半世紀、再び擡頭し能はざりしは所以ある。然し、莫臥兒王朝も漸く西山落日の悲運に瀕して居る。シークの受けし打擊が如何に絕大であつたとは云へ、五十年間の臥薪嘗膽は、又、よく、バンダの仇を復し得る氣運に會し得た。かくて後、百年の獨立國を保ち、英軍に占領されてより、莫臥兒朝も滅亡し、シークは今や忠實なる英國の味方と化して居る次第であ

る。

（二）シーク教徒が、百年に亘つてイスラムの大敵から、絶えず迫害を受けたに拘らず、再三再四隱微の間に勢力を馴蒸しては、復讐を計り、遂に成功して西北印度の獨立國を捷ち得たのは、如何なる彈力に依るか。之を一考する必要がある。而して、吾人は先づ二個の原因を想定する事が出來る。莫臥兒朝の末年パンヂャブの邊民は、偶像を禮拜する所以を以て、熱信的ムザルマンの痛擊を被つたが、之を避難する爲めには、唯一神の崇拜を公言して、而も、カストと印度教とを左まで排斥せざる、ナーナクの教徒なりと宣言するが、最も策の得たる者であつた。此の回教を避けんが爲めのシーク教徒は、異教の迫害、壓迫の愈々痛烈となるに隨つて、其の數を增した。之が第一の原因である。又、グル十世が軍國的シーク教を宣言して、カストを絶對に退けしより、之に不滿を感ずる者は、同志相集つて原教保持に努め、別に一派をなしてナーナク道者（Nānak-panthis）と云つた。之は、グルの新五大義務に服從する、ケスドハーリー（Kesdhārī）教徒に對する名で、彼等が、二方面に分れて、汎シーク教の範圍を擴張した事が、軈て、教徒の數を增し、隱然、大勢力たり得る基礎を設けた事になる。之が、第二の原因と思はるゝ。然し、何は兎もあれ、教團中心人格が絶待意志を發表する事は教徒の性

質を變じ得る根本動機であらねばならぬ。六世以下のグルやバンダは、能く外境に順應して教勢の維持擴大に努めた。教義も自ら教徒の剽悍凶暴なる性格に一致する樣に變化された。內界と外界と調和せる彼等の軍團力は、同じく蠻勇の囘教徒をも、能く屢々打碎く事を得た。慘禍は戰每に、甚だしくなり、互に復報の憤念に驅られし百五十年を送つた。斯くて、偉大なる首領の出現と俱に、シークは大勢力を樹立したのであつたが、宗教が政治と結合せる峻烈な結果は、最も著しく此に見らるゝと思ふ。

又、斯る慘劇の間に立つて幾度となく代つたグルが悉く四十五十の壯年、若しくば、夫れ以下の若年で世を果てゝ居るのは何故であるか、或は、西藏に見る喇嘛法王の如き、早世登仙の例があつたのでは無からうかとも想はるゝが、夫はさて措き、彼等が皆何れ劣らぬ蠻性を發揮したのは何故であらう乎。或人は云ふ、シークも耆那教もリンガーヤタ (Lingāyata) も、本來はカストを認めず婆羅門の僧權に反抗して分離獨立した一派であるから、彼等の仕へんとした僧侶は素養なき無智無學の者であつた、之れが、婆羅門的影響の遠かるに從つて、僧侶の次第に蠻性を表はすに到つた所以であると。今日印度の各地を旅行して見るに、婆羅門の青年は、一切を抛つても學を修

め智を磨かんの念に燃えたるを見るが、如何な都會にも、シーク、耆那、リンガーヤタの學者を見出す事が出來ぬと云ふ。之は、プーナ(poona)のクンテ(M. M. Kunte)氏が主張する所であるが、當らずとも遠からざる說であらう。バンヂャブの民は本來蠻的に生れて居る。彼等の多くは、シーク敎徒に非れば回敎徒である。此を導くに無智の蠻的人格を以てする、此の兩敎徒が百年に亘つて鎬を削るに於てや、有史以來の慘災を見しは、蓋し所以ある哉である。

(三) バンダが最も慘酷なる毒手に殉敎してより凡そ五十年間は、敎徒勢力の恢復期で、千七百六十三年には、再び精鋭を揃へて、シルヒンドの宿怨場を襲擊した。翌年に亘る長戰の後、アムリツァールの近郊にアフガン、アーマッド、シャー、ドゥラニ(Afgan Ahmad Shah Durani)を打破り、ラホールを占領して完全な獨立國を建てた。之をクゥールサ(Khalsa)の獨立國と云ひ、初めてデーリ王朝の名を刻せざる貨幣を鑄造し、ラホールを政治上の中心とし、アムリツァールを宗敎上の樞府と定め、政治は十二區の聯合委員に依る代議政とし、爾來八十五年の間、最初は回敎と衝突し、中頃は內亂に苦しみ、末年は英軍と交戰したが、よくシーク敎團の面目を保持した。十二代議員中、スカルチャキア(Sukarchakia)のランヂートシング(Ranjit Singh)は、最も有力で、遂に千

八百五年、二十五歳の青年血氣の精勇を以てマハーラーヂァ(Mahā-rūja)となり、他の委員を統一してシーク教團獨立國の首領となる。彼は、ラホール附近のモスクを破壞して金銀の裝飾を剝奪し、金板を以てダルバール、サーヒブ(Darbār Sāhib)なる、シーク本山殿堂のドウムを蓋ふた。黃金閣の名は此に出で、多くの回教徒か怨恨の焦點となつて今もアムリツァールの誇りとされて居る。啻に宗教上のみならず、軍事上にはゴビンドガルフ(Govindgarh)の堅塞を築き、心情を慰む爲めに美しき花園ラームバーグ(Rām Bāgh)を設けた。彼は、實にシーク獨立國最大の英主であつたが、千八百三十九年、五十九歳を以て歿するや、漸く內亂の曙光は現れた。翌年、其の子、クァラクシング(Khrak Singh)は死し、孫ナヲニハル(Nao Nihal)も、父の葬式の歸途非業の死を遂げた。數年の後シェルシング(Sher Singh)ラホールの司政者となつたが、千八百四十三年九月暗殺さる。後、ランジートシーグの子と稱するダリプシング(Dhalip Singh)が、首領となつたが、其の母ラニヂンダン(Rani Jindan)、兄弟愛人等三人の手を假つて行政の實權を掌握せんと計り、二人は暗殺され、實權はグラブシング(Gulab Singh)の掌中に歸した。其の他、煩雜なる內亂の詳細は記す必要がない。彼等は之に多年の鬱憤を他に向つて拂らさんと企て、端なくも英軍との衝突を起し、此に第一回シク戰爭

を見るに到つた。政治に宗教に、異見を固執する英軍に對し、彼等が多年の宿恨は千八百四十五年の暮に爆發し、ストレッヂ河を渡つて英人の本據を衝いた。翌年、二月十日、ソブラヌン(Sobraon)の激戰を以て戰陣の幕は閉ぢられ、ヂャランダール、ドーブ(Jullundur Doab)は英領と化し、カシュミールはグラブシングの有に歸し、バンヂャーブの執政は、英人ラホール知事の監督の許に、ダリプシングが司る事となつた。其の後、二年を經たる年の四月二十日、マルタン(Multan)に起つた英人士官二名の暗殺事件は、野心滿々たる英人に好辭柄を構ふる機會を與へ、第二回シク戰爭は此に開かれ、數度小戰の後、翌年正月十三日のチランワラ(Chilianwala)の大戰と、二月二十一日のグゼラート(Guzarat)大勝とが、英軍の有利に極を結ぶ事となつた。此にシーク獨立國は、千八百四十九年を以て、政治上の權力を消失した譯であるが、尙ほ、宗教上の信仰は、容易に英人の侵略を許さない狀態に在る。爾來、印度政府の忠實なる臣下と化し、千八百五十七年に起つたベンガル土民の叛亂當時の如き、英國政廳に對する好意を遺憾なく發揮したのであつた。

第六　シーク教の現狀

政治的方面の推移は之を略述したが、次には、教會史の一班を述べて、シーク現況を評し度いと思ふ。ナーナクの登遐後、教團は年と俱に分れて七派となつたと傳ふ。現に、傳はる名で、大部分のシーク教徒をサヒッヂドハリ（Sahijdhari）と稱し商、農に服業する信仰の民を概括するも、又は、ニルマラス（nirmalas）卽ち清淨教徒と云ふも或はファールサ（Khālsa）と呼ぶも、俱に、グル十世以後の獨立國時代の遺物と云つて宜からう。グルゴビンド、シングに服從せるシークをケスダーリーと云ひ、彼に反對せる復古派をナーナク道者（Nānak-panthis）と對稱する事も前記した。ナーナク道者は、シングの名を共用せず、五大義務に服せず、頭髮を圓剃する所よ、ムンダ（Munda）と呼ばれ、肉食、飲酒を厭はず、洗禮灌頂は、所謂、チャランカ、パーフル（Charan-ka-pāhul）で、一般ヒンヅーの儀式に倣ひ、グルの足指を浸せる砂糖水を飲む等、此等を、此の派の特長とする。又、前述のウダーシス（Udāsis）一派と云ふは、ナーナクの子、スリチャンド（Sri Chand）の定むる苦行の戒則に依る徒で、一切のカストより、獨身者多く入り、特に『アーディグラント』とナーナクの畫像とを禮拜して讃歌を誦し、音樂を奏して燈を供養し、中には、寺に行かずして無形の神（Mirankal）を祈る者もあり、毛繩を頸に、鐵鎖を腰に纏著し、菓殼を以て托鉢し、長髮にして小頭巾を被り、『アラク』（Alakh）と連呼しつゝ、

婆羅門やヒンヅーより諸種の施食を受くる等を、此の派の特徴とす。又、パンヂャブでは、無形神を祭るを以て有名なニランカリス（Niranḱalis）一派がある。特に中央印度に行はるゝシーク教徒の、墮落した形に、ストラシャーヒス（Suthra-Shāhis）と云ふ一派があるが、乞食を業とし乍ら一切の放逸不行蹟至らざるなく、多くは破産せる放蕩家の、所有カストより烏集せる一派で、自分の名を廢して多くは單にナーナクシャーヒ（Nānakshāhi）とのみ呼び、教祖が曾てメッカに巡禮して持ち歸つたと云ふセリ（Seli，頭に卷く黑毛繩）とシャーヒ（Syāhi，額に黑線をかくインキ）とを身に負びるを以て派標とし、合財囊を下げ、ナーナクとカーリ（Kāli）女神に献げし二本の象牙棒を打しつゝ、アウランゲゼブよりの特權と自負して、切に一錢半錢を乞求し歩き、バリ（Bali）帳に施物を記入し、飲酒、喫煙、何等、清淨なる態度無き、此の派の現狀である。千九百十一年の調査に據れば、印度に於けるシーク教徒の數は二百十七萬千九百八人で、內、二百萬人餘はパンヂャーブに在り（特に土民州に多く）三千餘人は西北諸州に、一萬二千人ほどはボンベイ州に住すと云ふ事である。其の他、中央印度にも來往し、此等は何れも上記諸派の何れかに屬して居る。之を政治的に大別すれば、マルワイ（Malwai）地方と、マンヂャ（Manjiha）地方とに二大別する。前者にはパティアラのマハーラー

ジャ (Mahārāja of Patiala) ジンド、ナブア、ファリドコットのラーヂャ (Rājas of Jind, Nabha, Far'dkot) が、其の代表的となり、後者には、カプルタラ (Kapurthala) のラーヂャが代表として、政治の要路に處して居る。但し、現今のシーク教徒は、洗禮灌頂を受けずして、自然ヒンヅーとなれる者もあり、カシュミールの如きも、殆んど該教の俤を絶つて居る有樣であるから、其の實數は極めて知り難い。又、人種の上から言へば、シークヂャット (Sikh Jat) は、彼等恰好の代表的軍人適能者で、土民兵中、一二を爭ふ優勝の位置に在り、投槍と火繩銃の操縱に長け、英國政府の最も信賴する所である。但し、最近に於ては、世界大戰以來彼等信仰の中心地たるアムリツァールが革命運動の策源地と化し、慷慨悲憤の絶叫は、何物かを生み出さずんば止まぬ勢となつて居ると聞く。シーク教徒が其の中心たる事も想像し易いから、宗教的生活としては、或は回教と混じ、ヒンヅーに隱るゝ者續出するであらふとも、政治的運命の開拓家としては、必らず將來を囑目して宜からふと想ふ。彼等の前途、亦、多端なる哉である。曾てマコーリフ (M. A. Macauliffe) 氏は、シーク教の、宗教、政治、道德の上に齎せる功績を數へて曰く、『偶像、僞善、カスト固執、寡婦の孤獨、婦人の幽閉、酒類、喫煙、殺兒、誹言、ヒンヅーの神聖浴場を嚴禁し(消極的に)又、忠實、恩惠の感謝、博愛、正義、公平、眞理、正直、其の他總ての高尚なる市民と

しての道德を諄々と敎へた(積極的)』と。吾人も、此の言の肯綮たるを認めて宜い。

第七　アムリツァールの黃金閣

シーク靈場中の最、巡禮の中心、信仰の歸趣は、アムリツァールのダルバール、サーヒブ(Darbār Sāhib)殿堂である。ドウムは鍍金銅版を葢ひ、燦然たる金光視覺を奪ふ程であるから、歐洲人は、之に黃金閣の名を與へた。吾人は、上來論究したシーク敎の性質一切を此の重閣講堂中に具體化されて觀る便を有するが故に、終りに一言此のゴールデン、テンプル(Golden temple)の事を說かう。此の地は、元、グルラムダスが莫臥兒帝の許しを以て創剏せる所、グルアンジュンが完成せし事前述の如し。其の後千七百五十四年、回敎の王、アーマドシャー(Ahmad Shāh)より燒失されしを、敎徒、漸次恢復しランヂットシングが、ラホール在の多くのモスク(Mosque)より金銀の莊嚴を奪ひ來つて裝飾した所、淸澈掬すべき池水の中央に聳立し、四壁、步道は悉く大理石を以てし、側壁の下半は美しき象嵌彫刻の裝飾あり、黃金のドウムと共に旭日、夕陽に映ずる姿は、建築美の極と謳はれて居る。モニエール、ウイリアム(Monier Williams)氏は、アグラのタヂマハール靈廟に亞ぐ立派さを讃し、ファーガッソン(Fergusson)氏は、十九世

紀建築の模範と稱した。而して此の建築の特長とする處は、一見して回教と印度教との折衷式なる事を知り得る點にある。殿堂中央の聖室には、四本の銀柱に支へられし天蓋あり、中に錦繡に包まれし聖典『アーディグラント』を安置す。其の他、何等の偶像も畫像もない。日々の參拜者は、唯、聖典に向つて賽錢供物を献ずるのである。四周の池水は教徒の淨齋沐浴にも用ひられ、洗禮灌頂の水にもする。曾て、千七百六十二年アーメドシァーより、死牛を投せられたが、教徒は後に恨を雪ぎ、捕へられしアフガン (Afghan) は、豚血を以て礎石を洗はされしと傳ふ。焉んぞその皮肉なる報復を見ずや。多くの僧は、朝夕、集つて聖典の前に讃歌を呪し、樂を奏す。參拜の者は、教徒に限らず、中流の婦人に多く、四、五、ルピーを布施して經典の讀誦を求め、聖室を右遶して供物を献ぐ。但し、形に於て教義の影は殘るが、其の精神は疾くに閑却せられ無信の行者、淫猥なる男女、堂の内外に集つて、俗樂を希ふ者少なからぬ現狀は、寔に慨嘆に堪えない。堂の側にアカルブンガ (Akal Bun,a) 七層塔、僧院 (Akharas) あり、池には、『罪苦消滅』(dukh bhaujanee) の靈蹟あり、門頭の板刻には、"This building was erected by the great Guru Ram Das King of Kings" の旨を鏤記してある。此等附屬的建物中、特に注意すべきは、アカルブンガである。此の休憩處の一室に、ハルゴビンドの遺物と、聖典の

盗難を防ぐ爲めの夜間の奉安處とがある事は、前述したが、此に又教徒の洗禮場が設けられてあるのである。シーク教の初代に在つては、教徒の洗禮は極めて寛大で、子供は『グラント』に關する名を頂く事に依て教徒と成つた者であつたが代々のグルが教勢の擴張を念とした所から、多くの教徒に對して嚴密な灌頂式を令行する必要に逼り、グル十世の如きは、子供は生れ乍らにしてシークの軍人たり、一定年齢に及んでは必らず灌頂式、パーフルを行ふて誠實を誓はしむるに到つた。其の灌頂は此室で行はれ、所謂、"Khandaka-pāhul" (word-baptism) を行ふた者である。其の法、先づ甘露池の水を汲んで瓶に入れ、砂糖を混じて、五人の教僧之を擁し、呪文を口誦しつゝ短劍を以て攪拌し、之を洗禮者の頭と目に灌注し、終つて餘量は飲下さす。カラバルシャル (Karah-purshal) の献菓は、六人共食し、以後、眞のシーク教徒の一人となつて神の冥助を得、勇氣を加へらるゝと信ず。洗禮者、誓ひの語には曰く、『我はバトナに生れ、アリワリア (Ali'walia) に住し、ゴビンドシングの子なり』と。何人もグル第十祖に倣つて之を言はしむるは、同一教祖の下に立つ同一教徒たりとの觀念を明確に自覺せしむる爲めである。此の强要に不滿を懷いた一派が、前記のナーナクパンティス派で、彼等は、"Charan-ka-pāhul" (foot-baptism) を好んで受けた者である。

上來論究する所に依て、吾人は、此の十六世紀の初葉に起つたナーナクの新宗教運動が、現代に到るまで、凡そ四百年間の教會史的、教理史的變化を概說し畢つたと信ずるが、シーク教が果して印度教の一派であるか、或は回教の一派ではないか、之を如何に論評すべきかは興味有る懸案として殘つて居る。教徒自らも、或は前者を肯定してヒンヅーに走るあり或は後者を是認してイスラムに改宗する者も多い。其の史實より論ずれば、シークは正しく印度の回教であるが、其の理想立脚地から見れば、ヒンヅーの流を汲む。教徒分離の傾向は悲しむべき事ながら、一方にはヒンヅーと調和せんとする傾もある。蓋し、婆羅門は、グルを以て或神の化神と認め、『グラント』の精神を以て彼等の古典中に根據有りと主張せんと企つる一方、シーク教徒も、此のヒンヅーの權證化を歡迎するかの觀があるからで、恐らく、今後半世紀の中には、彼等は、皆、ヒンヅーに還元され竭すであらう。

嗟乎、昔者、圓滿なる人格の所有者が稱道した平和の教は、今、尙ほ、到る處溫乎玉の如き白髮老顏の教祖畫像として崇拜されて居るにも拘らず、他方、之と相並んで身に大劍を負び、前に弓箭を橫へたるグル十世の武將像が敬禮さるゝ狀勢に到り、神の慈愛に歡泣した教徒が今や印度一流の軍人と化し、信仰中心の靈場を革命の中心と變せ

んとは、時勢の變遷、宗是の推移、又、洵に吾人の熟考三思を強ふる案件ではないか。吾人は終りに重ねて言はん、民族信仰の大流は淘々瀁々として進む。之に逆ふ者は留る可らず、留り得る者は大流に注いで之に同化し、本來の面目を失して、又、滔々漫々と今日に流るゝと。シーク教の如きは、著しく對立した回、印、兩教衝突の生んだ火花である。此の小支流が大流に注いで進む元より異論はないが、吾人は唯信仰と政治との關係の最も興味ある、活ける宗教として、シーク教の今昔を概説したに過ぎない。新宗教の犯罪問題嚴しい今日、聊か世人同好の士の覆醬にもならば、幸甚である。

（大正一〇、七、一、稿）

主要なる參考書

○M. A. Macauliffe, The Sikh Religion.
○Cunningham, History of Sikh.
○J. H. H. Gordon, The Sikhs.
○Shib Chunder Bose, The Hindus as they are.
○Journal of the Royal Asiatic Society.—1871, 1900.
○Asiatic Reserch:s, Vol. XI, XVII.
○Edmund Hardy, Indische Religionsgeschichte.
○W. Crooke, Natives of Northern India.
○Elphinston, History of India.
○Lenzil Ibbetson, punjob C.nsus Report of 1881.
○E. D. Maclagen, panjub Census Report of 1891.

○Fergusson, History of Indian and Eastern Architecture.

○Monier Williams, Religious thoght and life of India.

○John Campbell Oman, Cults, Customs and Superstition of India.

○J. Murray Mitchell, Hinduism, past and present.

○The Great Religions of India.

○E. W. Hopkins, The Re igions of India.

○L. D. Barnett, The Heart of India.

○G. F. Moore, History ot Religions.

○John Morrison, New Ideas in India.

○James Douie, The Runbab, Noath-West-Frontier province and Kashmir.

○M. M. Kunte, Vicissitude of Aryan Civilization in India.

○R. V. Russel, The Tribes and Castes of the Central province of India, Vol I.

○John Murray, Handboo'k to India, Burma and Ceylon.

○(姉崎正治)印度宗教史

○(高楠順次郎)印度五千年史

○(松本文三郎)印度雜事